View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

連載「必修」英語のマネジメント入門１　ニッチ時間を活用しよう（出版前原稿，Post-print version）

著者	竹内 理
雑誌名	「必修」のねらいを生かす授業づくり
巻	24
ページ	76-77
発行年	2007-04-12
権利	(C) 明治図書出版株式会社； このデータは明治図書出版からの許諾を得て作成しています。
URL	http://hdl.handle.net/10112/6953

連載：「必修」英語のマネジメント入門１　ニッチ時間を活用しよう

（出版前原稿（**Post-print version**））

関西大学教授　竹内理

はじめに

本連載では、これから 4 回にわたり「必修」時代の英語授業を行っていく上での基盤となる考え方を提案・議論していきたい。第 1 回目の本稿ではニッチ時間を活用しよう」と題して、時間マネージメントについて考えていく。

与えられた時間はどれくらい?

「必修」というと何か途方もない時間数が英語に割り当てられるような錯覚に陥ることがある。ところが、実際「必修」に向けての条件整備のなかで割り当てられるであろう時間数は、週 1 単位時間・年間 35 週程度といわれている。報道等で伝えられるように必修化のスタート点を 5 年生と仮定すると小学校の英語に割り当てられる時間は、単純計算で合計 70 単位時間にしかならないことになる。

ここで比較対象として、中学校の英語を考えてみることにしよう。現在、中学校では週 3 単位時間・年間 35 週(1 学年 105 単位時間)という時間数が、教科としての「英語」に割り当てられている。選択の時間を利用して、これに英語授業を 3 年間で 35 週から 70 週程度上乗せしたと仮定すると、3 年間の合計時間数は 350 から 385 単位時間程度と考えられる。ただしl時間中ずっと英語の授業をしているわけではないので、実質の時間数(8 割で計算)は 3 年間で 280 から 308 単位時間程度と推測される。この時間数で、中学校の先生がたは悪戦苦闘しながら生徒に向き合っておられるわけであるが、小学校の先生がたに与えられる時間は、 この中学校の 20%にしか過ぎないということになる [1]。

外国語の習得にどれくらいの時間がかかるかは議論の分かれるところではあるが、中学校の先生がたは、現状の時間数では「まったく足りない」とよく指摘されておられることから考えると我々に与えられた時間数はかなり少な、ということになるのかもしれない。ここで「でも、小学校英語の目的は英語の習得ではなく、積極的にコミュニケーションしようとする態度の育成なのだから、この程度の時間数で十分ではないのですか」という反論が聞こえてきそうである。しかし「必修」時代になると、早晩、英語授業に「成果」を求める動きが強まるものと予想される。その「成果」は、一部「英語」特区にみられるような英語資格の取得率、あるいはテストスコアの上昇のような形にはならないであろうしなってはいけないと筆者は考えている。しかし今までのように、英語そのものに関する「成果」は求めないという状況が無くなり、目に見える形で成果を要求されるようになってく

[1] 70単位時間のうち81flJ (56単位時間)が授業に利用されたとして56÷280で計算した

ることだけは間違いがなさそうである。そうなるとこの時間数の少なさは、ボディーブローのようにじわりじわりと利いてくるものと考えられる。

ニッチ時間をかき集めよう

それでは、上述したような学習時間数の不足をどのようにして補っていけば良いのであろうか。もちろん授業時間を目一杯活用して、児童・生徒を英語に慣れ費しませることは言うまでもないことである。しかしそれだけでは不十分となれば、発想の転換が必要である。こんな場合、少なくとも 2 つの可能性が考えられる。l つ目は授業外{含む自宅)学習の促進で、もう 1 つはニッチ(niche:すき間)時間の活用である。

前者の授業外学習は、土曜学級、夏休み学級、自宅学習というような形で、カリキュラム外に時間を作り出す、いわば開墾型の時間マネージメントとなる。この場合、児童・生徒たちは自主的に参加する形式を取るので、どうしても個人差が生じてしまうという欠点がある。さらに保護者の理解も不可欠であり、教員の負担も大きくなる。また、自宅学習に比重を置くと成果が家庭環境の違いに左右されやすいという問題点も生じる。

一方、後者のニッチ時間の活用は、あまり利用されていない細切れの時間をかき集めて利用する方法であり、いわば落ち穂拾い的な時間マネージメントとなる。ニッチとは、本来、他の用途に利用されていない間隙のことであるが、小学校にあまり利用されていない時間というのは見つけられないのでここでは朝礼や終礼、あるいは中休みなどの時間を少し割いて、その中に毎日 10 分程度、英語の学習を埋め込んでいくという方法のことを指す。筆者はこのニッチ時間の活用こそ、学習時間不足を補う時間マネージメントの切り札になると考えている。たとえば、このニッチ方式を隔日 10 分間で取り入れたとすると 1 週間 30 分、35 週で年間おおよそ 21 単位時間にもなる。毎日取り入れたとすると、1 週間 50 分で、年間おおよそ 35 単位時間もの学習時間を作りだすことができる。しかもこの場合、 1 週間に 1 回という形の授業が新たに追加されるのではなく、習ったことを毎日のように復習したり、繰り返したりすることが出来るという、英語学習にとっては願ってもないような形態の練習時間が作り出されるのである。

ニッチ時間はこう使おう

先生がたの中には、「この形態だと ALT の助けが期待できないな」とか「毎日の準備の負担が増えるな」と不安を抱かれるかたもおられるであろう。たしかに ALT の助けがない状態は不安かもしれないが、このような「担任主導」(あるいは担任単強)の形態は「必修」の時代においてはもはや避けて通れないことであり対処していかねばならない常態と考えられる。ただしその際に、日々の準備の負担を軽減していくことは考えて当然であろう。筆者が最近よくお奨めしている負担軽減策は、ニッチ時間の内容と手順を共有化する方法である。ニッチの時間では新しいことを導入せず、 これまで学んだことの復習に専念する。そのための手順や内容(含む教材)は学年で統一して、各教員が ALT の助けを得て輪番制で

準備していくというものである。

おわりに

労力に対する効果を考えた時、ニッチ時間の活用はきわめて効率の良いやり方である。限られた時間を嘆くのではなく、ニッチ時間をぜひ上手に活用して成果を上げていきたいものである。次回は、本稿でも少し触れたが、内容と手順の共有化について考えていきたい。

参考文献

竹内理 2006. いまこそ学級担任が主導する時『小学校英語セミナー』20 号 pp.6―7.